

『主に叫び求めよ』(ヨエル書 1章 1-20節) 2021.5.2.

<はじめに> 連休を迎えましたが、昨年に続きステイホームを求められています。この時期をどう過ごそうかと苦心しています。我慢には限界がありますが、忍耐はその先に進むことができます。明確な目的と目標があるからです。私たちは何にそれを見出しているのでしょうか。

I 未曾有の危機(1-7、17-20)

① 預言者ヨエルの書(1)

ヨエルは「主は神である」の意味です。旧約に同名異人が 13 人いる一般的な名前です。この預言者ヨエルは、ペトエルの子である以外は不明です。王名が無く、周辺国の記述等から、紀元前 830 年頃、南ユダ王国ヨアシュ王幼少期と見る学者が多いようです。

② イナゴ・バッタの大発生(2-7)

本書の背景にはイナゴ類大発生による被害がありました。昨春にもアフリカから東南アジアで起こっています。強大・膨大な軍勢に匹敵する威力で襲いかかり(6)、4 度の波状被害が描かれ(4)、その結果、作物も草木も食い尽くされて、国土は荒れ廃れました(7)。

③ 焼き尽くされた牧場(17-20)

干乾びた大地に残った種を蒔いても生長せず、穀物蔵は空しく放置されました(17)。家畜たちが食む牧場も無くなり、さまよい滅んでゆきます(18)。枯れた大地を野火がなめ尽くし(19)、水の流れも涸れて、野の獣さえもあえぐほどの窮乏に見舞われました(20)。

II 喜びが消え去った(8-16)

① 喪に服す民(8-12)

畑は無残な姿になり(10)、野のすべての木々が枯れました(12)。何とか立て直して、翌年新芽が出る見込みさえ断たれるほどです。農夫は収穫が無くなり(11)、飲む者の口から酒は断たれ(5)、主の宮への献げ物も断たれ、祭司たちも喪に服す他なくなりました(9)。

② 喜びが消え去った(12、16)

働ける場がある、労苦の先に収穫がある、収穫の実を食する、収穫の感謝を共に喜び、神に感謝する、さまざまな困難課題の中でも次を期待できる。これらは生きる喜びと楽しみです。今やこれらは人の子らから取り去られ、雲散霧消となりました。

③ 主の日は近い(15、マタイ 21:43-44)

思いもよらない破壊と苦難の現状を、預言者は近づく主の日と重ね合わせて見えています。公正な支配者であり審判者である神なる主がこの地に臨まれる時、主は地に報いと裁きをもたらされます。その日は高ぶる者には破壊の日、へりくだる者には救いの日です。

III 主に向かって叫び求めよ(13-14、19)

① 祭司たちへ(13)

預言者は同じ神に仕える祭司たちにまず呼び掛けます。歓喜と祝福は剥ぎ取られました。粗布をまとう真摯な悲嘆を表す先陣としてです。献げ物が退けられたとは、主が拒絶されたのでしょうか。主に感謝して献げる収穫も主の恵みで、それが差し止められたのです。

② すべての者へ(14)

食物が断たれること(16)と断食とは何が違うのでしょうか。祭司たちを通して全国民を集め、心一つにして神なる主に叫び求めるように命じます。主の御前で心を溶かされて、心と生活の中に潜む罪汚れ、反抗・怠慢と不服従の灰汁を取り除き、きよくされるためです。

③ 預言者の役割(19)

預言者ヨエル自身が、口火を切って主を呼び求めています。これが預言者の役割です。今も神なる主は、ご自分の民・祭司・預言者にまず呼び掛けられます。地の上には絶望しか見えないとき、主に叫び求めるのはここからしか始まりません。

<おわりに> ヨエル書はペンテコステの日のペテロの説教で引用されています(使徒 2:16-21)。今月 23 日のペンテコステに向けて、この預言者ヨエルのことばは、私たちに真摯な反省吟味から来る悔い改めと、主のあわれみと救い・きよめを叫び求めるようにと促しています。(H.M.)